様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００３４８

研究課題名（和文）近世前期における史書・軍書類の編纂・出版と情報流通の研究

研究課題名（英文）Research on the publication of historical books and information in the early modern period

研究代表者
倉員　正江（長谷川正江）（KURAKAZU, Masae）

日本大学・生物資源科学部・教授

研究者番号：７０３０７８１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　800,000円

研究成果の概要（和文）：　甲州流軍学者小早川能久編写本『翁物語』の諸本調査や、能久の弟子香西成資著『武田兵術文稿』刊行に至る事情を考察し、泰平の世において武辺話を語り継ぎ出版する意識を考察した。そこには戦国末期から近世初頭における諸将の活躍を家門の武功として顕彰し、戦乱の世の教訓を平和な時代に回顧する意識が見られる。それにとどまらず、豊臣秀吉の朝鮮出兵に対しては、従軍した武将の活躍と同時に、人民の疲弊と厭戦感も併せて記述し、その無謀さを批判していることが認められる。成資が、福岡藩儒貝原益軒との交流の中でそうした共通認識に至った可能性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　『翁物語』の諸本は錯綜しており未見の本もあるが、異本・改題本などの整理が進んだことは、今後に向けて有意義であった。小早川能久の伝記についても、毛利家の兄弟姉妹等家族・親戚関係、特に従姉に当たる大奥の老女寿林との関係、師匠小幡景憲・門人成資との交流など、時代の転換期に生きる軍学者の実像につき、かなりの新知見を得られた。
　「宝永落書」についての考察は当初の計画外ではあったが、中世とは異なる近世期の落書の性格と武家社会における情報伝達、加えて甚大な自然災害からの復興と「世直し」願望といった、現代社会にも通じる要素を指摘することができた。

研究成果の概要（英文）：A survey of various manuscripts of Koshu-style military scholar Yoshihisa Kobayakawa's manuscript “Okina Monogatari” and consideration of the circumstances leading up to the publication of “Takeda tactics manuscript” written by Yoshihisa's disciple Shigesuke Kozai, and the intention to edit and publish the of military tales in the peaceful times. There is a sense of honoring the achievements of various generals from the end of the Sengoku period to the beginning of the early modern period as military deeds of the family, and of looking back on the lessons of a war-torn world to a time of peace. Not only that, but he also criticizes the recklessness of Toyotomi Hideyoshi's dispatch of troops to Korea, describing the success of the military commanders who served there as well as the people's exhaustion and disgust at war. He pointed out the possibility that Shigesuke came to such a common understanding through his interaction with Ekiken Kaibara, Confucianist of Fukuoka domain.

研究分野：日本近世文学

キーワード：小早川能久　小幡景憲　香西成資　寿林　毛利秀元　小早川隆景　朝鮮出兵（壬申倭乱）　宝永落書

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

筆者は過去に 4 回にわたり科学研究費助成事業の交付を受け、研究成果を発表してきた。前回の 2015～2019 年度の研究期間において、甲州流軍学者小早川能久の著作『翁物語』（写本巻冊数不定　明暦二年〈1656〉成）に注目した。本書については、

> 本書は、軍事上の事歴を記し、教訓の和歌を加えて、その子に書き与えた形をとっている。巻一武州八王寺城攻めのことから北条五代の事蹟、戦争論などに至り、すべて百十二件にわたっている。（中略）写本で伝わっているうちに、巻教は二巻本・八巻本・十二巻本など不同になり、また挿絵入りの本もある。(『国史大辞典』「翁物語」の項)

と、東京大学史料編纂所蔵本をもとに記されている。内容は戦国時代から近世初期にかけての雑多な武辺咄であるが、記述は必ずしも年代順ではなく利用しづらい点がある。活字翻刻もなく、従来もほとんど言及や検討がなされてこなかった。それでも筆者が前回考察した三増合戦の批評、小瀬甫庵の動向と『太閤記』の評判など、甲州流軍学の枠組みを超えて興味深い逸話が存する。豊臣秀吉の朝鮮出兵、関ヶ原の戦い、二度の大坂の陣関連の記事など、近世軍書の研究に資する点も多く認められる。能久の師匠であった小幡景憲（元亀三年〈1572〉～寛文三年〈1663〉）からの聞書きが多くを占めるが、他の武将からの聞書き、能久自身の体験談も少なくない。伝存本数も少なくないため、江戸期を通じてかなり広く読まれたことが想定された。

書名の「翁」は、景憲を指すものと筆者は考えた。景憲は甲州流軍学の祖として名高いが、その実像については不明な点も多い。能久は久留米城主小早川（毛利）秀包の三男で、実母は大友宗麟の娘ドナ・マセンシアという名門の出身ながら、早くに毛利家を離れたと思しく、生没年も未詳とする書が多い。後に高松藩に出仕したことは知られているが、それ以前の動向はほぼ未詳である。松平頼重に従ったと見られることから、頼重の実父である水戸藩主徳川頼房との関係が想定された。『翁物語』の記述や各巻末の識語から、本書はおそらく元服前と思しい三人の「子孫の童子」に向けて、教訓的な意味合いで執筆されたと推測された。その意味では純粋な軍書とは言い難いとも考えた。そこでまず景憲と能久の師弟関係や伝記的事項、家族や交友など周辺の人物関係を明らかにしたいと考えた。二人とも交友関係が広いことが予想できたため、人的交流や情報流通の面で、必ず新知見が得られるであろうと推測できた。

２．研究の目的

過去の科研費取得研究課題とほぼ同様ではあるのだが、近世前期に成立した写本の史書・軍記類の成立事情を明らかにし、版本との影響関係を考察するのが本研究の目的である。幕藩体制確立期以降は、多数の写本の史書・軍書が編纂された。その背景には各藩祖以下数代にわたる幕府・藩政への貢献を顕彰する意図、また泰平の世が持続するようになってから困難な戦国時代を回顧する風潮などがある。ただし、近世初期においては、史書・軍書の類を“刊行”するという行為は、特に武士階級からは売名行為・営利目的のように見られ、必ずしも好意的に受け止められていたとは言えないようである（前述『翁物語』小瀬甫庵評）。そうした風潮がどのように変化していったのかを、考察することも必要であると考えた。

特に軍学者を中心に、史書・軍書の編著者の中でも従来研究の乏しい者の実像を追究することも目的とした。具体的には、前述の小早川能久を筆頭に小幡景憲を想定していた。彼らに共通する特徴は、市井の講釈にとどまらず、幕府や諸藩と関わりを持った時期があったことである。そうした点を踏まえ、軍学者の実態を再検討する必要があるとも考えた。

３．研究の方法

（１）『翁物語』の諸本調査・・・新型コロナウィルス感染拡大により訪書が大幅に制限されたのは想定外であったが、国立公文書館蔵内閣文庫等の画像公開が進んでいたことで、調査にかなりの進展を見せた。複写を入手済みであった金刀比羅宮図書館蔵本と比較することで、冊数表記に錯誤はあるが、金刀比羅本を原初形態の底本として認定してよいとの結論に達した。

（２)能久の伝記資料の収集・・・コロナ禍のため調査旅費が費消できないかわりに、古典籍資料の収集に努めた。「甲州流軍学」関連資料を古書店から一括購入した中に、『小幡小早河両師伝』二点があり、伝記的に貴重な参考文献となった。

（３)秀吉朝鮮出兵関連の記述の考察・・・前回科研費による研究成果の蓄積を生かし、能久の門人で福岡藩軍学者となった香西成資著『武田兵術文稿』所収「豊臣閣下撃朝鮮国論」を分析した。『黒田家譜』の関連記事と比較し、福岡藩儒貝原益軒と成資の言説を比較検討した。

（４)内閣文庫蔵『墨海山筆』八「宝永落書」の分析・・・当初の計画外の資料ではあるが、武家社会における情報伝達の一資料として用いた。深刻な自然災害からの復興や将軍交代期における「世直し」願望の視点から考察した。

４．研究成果

研究成果は別紙の雑誌論文 4 件、招待講演 1 件に集約されている。後者は、従来継続してきた科研費による研究成果を評価されて、中国・浙江大学日本文化研究所主催のシンポジウム「朱舜水的活動場景和人際網絡」(2022 年 11 月 12 日)のパネリストとして招待されたものである。日本人研究者はオンラインによる日本からの参加で、発表資料の中国語訳が公開された。筆者の研究対象が京都大学・茨城県立歴史館所蔵『大日本史編纂記録（原題　往復書案)』を資料として活用した水戸藩の出版事業研究から、彰考館と関わりの深い朱舜水へと筆者の研究が広がったことで、今回の招待講演につながったことは明記しておきたい。日本における舜水への追慕は、安積澹泊ら彰考館員や、『舜水朱氏談綺』・『舜水先生文集』編集刊行など水戸藩内にとどまるものではなかった。寛政の改革の一環として、江戸の湯島聖堂が新築された際に舜水の指導が具現化され、聖堂が新名所となったことで、さらに注目が集まった、という経緯や、寛政の改革当時の好学的社会状況を、本発表にて新たに指摘した。中国人研究者との意見交換も出来たことは、大変有意義であった。

以下、4 件の論文の研究成果を中心に、研究成果の新知見を以下に記す。

(１)①『翁物語』の原初形態本・・・金刀比羅宮図書館蔵本等。八冊仕立て序・跋なし。各冊末尾に異なる和歌一首を添え、「小早川式部少輔　平能久(花押)」の署名。成立年次は承応元年(1652)二月四日～明暦二年(1656)十二月十九日。宛名人「辰之助」「鴨之助」「又助」の三人は、能久の娘で高松藩士戸祭主水の妻となった女性の儲けた男児、つまり能久の孫たちと見られる。第八冊最終話の評語に、武士は武道を嗜むべき旨を説いて終わる。本来は、いずれ高松藩士となる孫たちへの平易な教訓を記す意図があったことを示している。

②『翁物語』の異本・・・①の和歌・署名・孫の名を省略、新たな異文を挿入する。異本Ａ岩国徴古館蔵本。香西成資家に伝来。異本Ｂ内閣文庫蔵本。また改題改竄本に東京国立博物館蔵本『小早川伝記』、内閣文庫蔵本『鶴頭夜話』、筑波大学図書館蔵本『老談記』がある。

『翁物語』の諸本は錯綜しており、本来の執筆意図から離れても流布していたことが分かる。

(２)小早川能久の伝記について、諸資料と架蔵本『小幡小早河両師伝』所収「小早川能久伝」を利用して判明した点を記す。

①生年は慶長三年(1598)、 没年月日は寛文六年(1666)四月十七日である可能性が極めて高い。
②慶長五年、能久の姉おさて十歳が福岡藩黒田家の人質となり、十五歳で家老吉田重成に嫁ぐ。
③能久は父秀包の死後、従兄に当たる長府藩主毛利秀元の家臣として近侍する。
④能久は従妹に当たる大奥の老女寿林の仲介で、徳川秀忠に小姓奉公する話が進むが、秀元の反対で頓挫する。寿林の実父は一条兼定、実母は大友宗麟の長女と見られ、両親は受洗した。
⑤能久は大坂夏の陣にて秀元軍として初陣、大坂城内で生捕一人を捕縛して秀元に叱責される。
⑥能久は元和六年(1620)に江戸に出て四谷の寺に寄宿、年次未詳ながら小幡景憲に入門する。
⑦浪人であった能久は、松平頼重付きの軍学者として採用され、頼重の高松藩移封に従った。
⑧慶安二年(1649)、香西成資が能久に入門、能久の勧めにより江戸で景憲に入門した後帰郷。
⑨寛文三年(1663)、能久の勧めで成資は福岡藩へ赴き吉田家を頼る。貞享二年(1685)に出仕。

(３)香西成資著『武田兵術文稿』(元禄九年貝原益軒序・宝永五年自序・同年自跋)は甲州流軍学書だが、甲州流に関係がない「豊臣閣下撃朝鮮国論」を収録する。前掲「小早川能久伝」の記述から、能久の伯父小早川隆景の「蹄碧館の戦い」における戦功を顕彰する意図があったことが判明した。また正徳元年(1711)に朝鮮通信使が来日した際、帰路大坂の本屋経由で本書を 56 部購入した旨が記される。金時徳により、本書が朝鮮でも享受された可能性が指摘されているが、この時の本によるものと、筆者は推測した。また福岡藩儒貝原益軒が編纂した『黒田家譜』「朝鮮陣」の記述と比較すると、隆景・秀包らを顕彰しつつも、朝鮮出兵に対する批判が展開されるが、成資と益軒の交流の中で、そうした見解が醸成された可能性を示唆した。

(４)韓国・檀国大学校で開催された「東アジアにおける非正常的体験と記録」をテーマとした「海外学術大会」(2023 年 10 月 17 日)でビデオ講演を依頼され、「宝永期の落書に見る災害復興と世直し願望」と題して発表した（別の科研費【課題番号 23K00303】による研究成果・韓国語訳を公表)。よって 2023 年度は「宝永落書」を資料として検討することとし、本科研費の研究課題に沿って、講演とは別の視点から論じた。

近世における落書(らくしょ)は従来江戸の民衆の声、またはそれを代弁したものとする見解が定説化していたが、少なくとも宝永・正徳期(～1715)までの落書は、幕臣を含む武士か僧侶、あるいは一部の浪人層など当時の知識人の視点で記されていることが判明した。落書は重大な事件、自然災害発生時、加えて将軍の交代期に多出する傾向があり、各藩の江戸藩邸から本藩に写本が回覧されたと見られるケースや、貸本屋を通じて流布したと思しい形跡も認められた。

香西成資の著作や伝記、高松藩・福岡藩における事跡についても調査を進めていたが、前述檀国大学校における招待講演を依頼されたこともあり、今回は論文化するに至らなかった。引き続き近世期の軍学者や、各藩の情報流通や知識の伝播に関して追究を続ける所存である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 倉員正江	４．巻 第20号
２．論文標題 『武田兵術文稿』巻之下「豊臣閣下撃朝鮮国論」をめぐって―『黒田家譜』「朝鮮陣」・『懲毖録』を中心に―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 人間科学研究	６．最初と最後の頁 130-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 倉員正江	４．巻 第19号
２．論文標題 小早川能久伝攷―附・翻刻『小幡小早河両師伝』―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 人間科学研究	６．最初と最後の頁 118-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 倉員正江	４．巻 第18号
２．論文標題 研究ノート「『翁物語』の諸本とその問題点についての覚書」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 人間科学研究	６．最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 倉員正江	４．巻 第21号
２．論文標題 宝永落書の再検討―付・翻刻『墨海山筆』巻八所収「宝永落書」抄―	５．発行年 2024年
３．雑誌名 人間科学研究	６．最初と最後の頁 95-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 倉員正江
２．発表標題 安積澹泊の朱舜水追慕とその後の展開
３．学会等名 朱舜水的活動場景和人際網絡（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関